

第4章

結 語

—古代における植物性食文化の解明に向けて—

1. 藤原宮・京・飛鳥地域出土植物種実

藤原宮・京跡の6遺構と飛鳥地域、石神遺跡の12遺構を調査対象とした。これらの遺構の年代は、共伴遺物から7世紀後半から8世紀初頭にほぼ限定できる。出土植物種実をまとめると、第26表のように48分類群が抽出される。これを遺構別にみておきたい。

まず、藤原京七条一坊の便所遺構SX7420からは、木本類はあまり出土していないが草本類の種類が多い。報文（黒崎編1992）に数量が示されていないが、小型種実の種類が多いのは、水洗選別の際の篩目の細かさによる。にもかかわらず、他の遺跡で出土しているクルミ類やモモ核などが認められないことは、注意しておきたい。この遺構で出土しているキイチゴ属核、クワ種子、サンショウ種子、ブドウ属種子、ノブドウ種子、ナス属種子、メロン仲間種子は、食用にされたものだろう。一方、草本類の多くは、食用ではなく周辺の植生を示す雑草群と考えられ、ホタルイ属果実、タカサブロウ種子、イボクサ種子などは湿地を好む植物である。

次に、井戸・土坑では、メロン仲間種子、モモ核、ナツメ核が基本的な構成になる。回収方法の問題もあるだろうが、種類数は多くはなく、これにスモモ類核やヒョウタン仲間種子、カキノキ種子、カヤ種子、オニグルミ核などは

第26表 遺構・時期別にみた出土植物種実（藤原宮・京・飛鳥地域）

遺構の性格		便所	井戸	土坑		運河・溝			
およその廃絶時期		7C末	7C末	7C末	7C末	7C後半	7C末	7C末	7C末
分類群	部位	SX7420	SE4080	SK8471	SK4060	SD1901A	SD4089・4090	SD1347	SD4121
木本									
カヤ	種子			△			○		△
イヌガヤ	種子						△		
ヤマモモ	核					△	△	△	△
オニグルミ	核			△			○	○	
ハシバミ	果実						○	△	
クリ	果皮					△	○	○	○
ツブラジイ	堅果						△		
モモ	核		○	◎	○		◎	◎	◎
スモモ類	核			○	○		◎	○	○
サクラ節	核						△		
サクラ属	核							△	
ナシ亜科	種子						△		
ムクロジ	核							△	
センダン	核						△	△	
ムベ	種子					△	△		
キイチゴ属	核	○							
ナツメ	核		△	○	△	○	○	○	○
カキノキ	種子				△	○			△
クワ	種子	○							
クワ属	種子					△	△		
コナラ属	堅果					○	△	△	○
マメ科	種子								△
サンショウ	種子	○				○	△		○
ブドウ属	種子	○				○	○		
ノブドウ	種子	○							
ミズキ	核					△			△
トチノキ	種子								
クサギ	核						△		
クマノミズキ	核						△		△
草本									
イネ	穎						△		
ナス属	種子	○					△		
トウガン	種子						○		△
メロン仲間	種子	○	◎		◎	◎	◎	◎	◎
ヒョウタン仲間	種子		○	◎		○	○	○	○
シソ属	果実	○				△		△	
ヤブツルアズキ	種子								
タデ科	果実	○				○			
ギンギシ	果実	○							
トウゴマ	種子						△		
ホタルイ属	果実	○							
カタバミ	種子	○							
アカザ属	種子	○							
キンボウゲ属	果実	○							
ナデシコ科	種子	○							
キク科?	果実	○							
タカサブロウ	果実	○							
アサ	種子	○							
カヤツリグサ属	果実	○							
イボクサ	種子	○							

※◎・○・△は数量の多寡を示す。数値はそれぞれの遺跡で大きく異なるので目安であるが、◎は100点を大きく上回り主体となるもの、

○は10～100点前後、△は10点未満。ただしSX7420は数量不明。なお、網掛けは◎に付す。第27～29図も同じ。

加わる程度である。これらはすべて食用可能である。

これに対して、溝や運河では、種実の種類が多くなる。メロン仲間種子とモモ核が主体となり、SD4089・4090ではスモモ核もこれらと並んで多い。土坑や井戸にもみられたナツメ核やヒヨウタン仲間種子のほか、オニグルミ核やハシバミ核、クリ果皮、サンショウ種子、ブドウ属種子なども一定量含まれる。これらのほとんどは食用可能な植物であり、食糧残滓として廃棄されたか、あるいは排泄物として処理されたものが含まれていた可能性がある。第1章でも述べたとおり、溝は土坑や井戸等とは違って流動的かつ開放的な遺構であり、異なる由来の種実が累積的に堆積することで、相対的に多様な組成を示すのだろう。

2. 平城宮・京出土植物種実

平城宮跡の35遺構と平城京跡の58遺構を調査対象とした。これらの遺構は基本的に8世紀中（奈良時代）のある時点で廃絶された考えられるが、一部には、12～13世紀ごろまで存続するものがある。遺構の性格別出土量の多い遺構をピックアップしたのが第27～29表である。内訳は、糞便遺構（ないし便所遺構）2基、井戸4基、土坑3基、建物1棟、溝・濠状遺構8条の計18遺構である。これらの遺構では夥しい数の種実が出土しており、また分類群の数も163分類群と藤原宮・京・飛鳥地域と比べて約3倍となる。これは、繰り返し述べているとおり、資料の回収方法による違いが大きい、植物種実が遺存し易い条坊側溝や井戸などの調査事例の多さにも起因していると推察される。

平城宮東方官衙の糞便遺構でも、モモやクルミ類などの大型植物種実は出土しておらず、比較的小型の種実が多い。糞便遺構の1つSX19198の分析（芝ほか2013）によると、食用植物として、メロン仲間種子、キイチゴ属核、アケビ属種子、ナス属種子、が主体となり、カキノキ種子、イタビカズラ節核、マタタビ属、サンショウ種子、ヤマブドウ種子、エゴマ果実などが含まれている。同じ東方官衙のSX19202では、これらのうちのカキノキ種子やアケビ属種子などの比較的大きな種実が含まれていないが、これは、分析した土壌量の差（SX19198：3000cc、SX19202：200cc）が影響していると思われる。いずれにしてもこれらの資料のほとんどは、籌木や寄生虫卵、ハエの蛹と一緒に出土しているので、排泄された便の内容物であると考えて間違いない。しかも平城宮内の官衙地区の遺構群であるという点は、時期だけでなく関わった人々が官人たちであるということまで絞りこめる可能性をもつ。今後、宮・京内での類似遺構の検出を期待したい。

次に井戸・土坑の様相をみておく。井戸で共通する特徴は、モモ核が主体ないし一定量出土していることである。この特徴はここには掲げていないが、京内のその他の井戸遺構でもいえることである（第3章、第14表参照）。またクルミ類やクリ果皮、スモモ核などといった木本類が糞便遺構に比べて目立つ。長屋王邸宅の井戸SE4770ではあまり種類多くないが、モモ核を主体として、これらの種類で構成される。モモ核の出土は井戸祭祀との関連も想起されよう。ここで取り上げたその他の井戸では、モモ核以外にも、多数の種類で構成される。平城宮東院の井戸SE16030、西大寺食堂院の井戸SE950からは、多くの種類の種実が出土しており、特に後者の数量は、平城京内でも随一である。SE16030では、モモ核が41点であるのに対してセンダン核が1200点以上出土しており、その特異な状況が際立つ。また式部省東方官衙の井戸SE17505では、ナシ亜科が主体となり、その他の種実の数量はあまり多くない。SE950では、モモ核も1500点以上あるが、それよりもメロン仲間種子が8万点超、トウガン種子約1万点、カキノキ属種子が約2000点など、食用植物の多さが特徴である。また、イネやオオムギ、コムギなどの穀物の炭化種子もある。これは、西大寺食堂院という食物を取り扱う施設の性格が反映された食用植物に特化したあり方であろう。塵芥の廃棄土坑や大型建物の柱穴採取穴でも、多数の種実が見つかる。これらの遺構では、モモ核は存在するものの主体とはならず、メロン仲間種子やクリ果皮などが多くなる。しかし、種実構成もそれぞれの土坑で多様であり、共通性はあまりない。

最後に溝状遺構である。ここでは8遺構取り上げているが、一見してわかるのは木本類種実の多さである。糞便遺構、井戸（西大寺井戸除く）、土坑と比較しても、その種類の多さは群を抜く。食用植物のカヤ、チョウセンゴヨウ、クルミ類、ヤマモモ、ハシバミ、アンズ、ウメ、モモ、スモモ類、サクラ属、ナシ亜科、ナツメ、アケビ属、カキノキ、サンショウ、ブドウ属は、ほとんどの溝状遺構で出土している。また草本類でもメロン仲間種子、トウガンが構成される。草本類は回収方法によって、回収量に差が顕著に現れるが、食用植物もかなり入っているとみただろう。ただし、溝状遺構には、マツ属やコナラ属など周辺の植生に反映された種実も多く入っていることは注意しておかねばならない。また、先述のとおり、溝状遺構は流動的かつ開放的であるという特徴もあり、時空間的な評価が難しいことも考慮にいれておかねばならない。花粉分析や他の出土遺物を含めた総合的な分析が必要となろう。

第27表 遺構・時期別にみた出土植物種実 (平城宮・京1)

[illegible]

3. 出土植物種実と文献史料

古代都城出土の植物種実は、木簡や文献史料も多く認められる。このうち食用可能なものを以下に列挙する（漢字の名称は、関根真隆（1969、2001）、油に関しては神野編（2014）を参照した。一部は重複して記載する）。

穀類 イネ（米）、オオムギ（大麦）、コムギ（小麦）、ヒエ（稗）、アワ（粟）、ダイズ属（大豆）、アズキ・ササゲ属アズキ亜属（小豆）、ソバ（蕎麦）、ゴマ（胡麻子）、エゴマ（荳子）

野菜類 メロン仲間（瓜、大瓜）、トウガン（冬瓜）、ナス（茄子）、クワ（桑）、ミズアオイ（水葱）、コウホネ（川骨）、ギシギシ属（羊蹄）

果物類 カヤ（榎）、クルミ類（胡桃・呉桃子）、モモ（桃子）、ウメ（梅子）、スモモ（李子）、ヤマモモ（山桃・楊梅）、キイチゴ属（伊知比古・覆盆子）、ナシ属（梨子）、アケビ（葡萄）、ムベ（郁子）、カキノキ（柿子・干柿）、クリ（栗、栗子）、ナツメ（棗）、ヤマブドウ・ブドウ属（蒲萄）、スダジイ・ツブラジイ（椎）、ヒシ（菱）

香辛料・油類 エゴマ（荳子）、ゴマ（胡麻子）、サンショウ（蜀椒、椒）、イヌザンショウ（蔓椒）、クルミ類（胡桃子）、イヌガヤ（閉美）、アサ（麻）、ツバキ（海石榴）、タデ（蓼・多豆）、コブシ（山蘭）。

管見の限りでもこれらの種類が列挙できるが、このほかの出土種実にも食用可能なものは多い。チョウセンゴヨウ、ハシバミ、アンズ、サクラ属、グミ属、イタビカズラ節（イチジク状果）、サルナシ、シマサルナシ、スイカなどはそれにあたろう。特にハシバミは、藤原宮・京、平城宮・京の複数の地点で果皮として多く出土する傾向があるので、一般的に食用されていたことが想定できる。このほか、イタビカズラ節やサルナシは、東方官衙の糞便遺構で出土しており、排泄された便の中に含まれていたと考えられるので、やはり食用であろう。また、1点ずつであるが石神遺跡のSD4089と西大寺食堂院井戸SE950から出土しているトウゴマ種子は、蓖麻子（ひまし）油の搾油に利用されるものである。

4. 今後の課題—古代における植物性食文化の解明に向けて

本書では、藤原宮・京・飛鳥地域、平城宮・京の出土植物種実を分類し、遺構ごとに集成した。これが奈文研が所蔵している種実資料のすべてではないが、全体像は網羅されている。最後に今後の課題を挙げて収束したい。

本文中でもたびたび述べたように、ここで取り上げた植物種実は発掘調査現場でピックアップされたものも多く、定量的な調査、分析によって得られたものは、数少ない。またそうした調査がなされたとしても、多くは木簡の回収に必要な篩目が5mmあるいは2mmといった、比較的目の大きな篩が用いられており、草本類全体をカバーすることはできていない。したがって、ここで「ない」ことが本来的に「なかった」とは言えない。また植物種実の残存の有無や量は堆積環境にも左右される。地下水位の高い場所ような酸素の遮断されるような環境でなければ残存すらしめない。それにもかかわらず、これほど多くの植物種実が回収されているのは、藤原宮・京、平城宮・京の特異な環境がある。木簡が残ることと同じ恩恵を受けているのである。そして木簡には食物の名前や量が書いてあることも多い。木簡と植物種実など実際の食物が残るといふ、稀有な環境をフルに生かしていかなければならない。

むろん、食文化復元には植物種実だけでは片手落ちである。動物骨や魚骨などの動物遺存体や、文献史料、絵図資料などを用いる必要がある。ここで取り上げた食用植物の数々は、食卓のごく一部にすぎない（食卓にのぼるかどうかもあやしい）のである。ただ、確実に古代都城やその周辺で食用とされていたもの考古資料に基づくことによって、時空間的位置を押さえることができることは強調しておきたい。

今後は、遺跡調査での定量的な調査、分析をおこなうこと、また周辺植生との関係を知るための花粉分析などとの併用という基礎的データの蓄積が必要である。また植物種実自体の形態分析や加工痕跡に関する分析など、まだまだ考古学的な分析が可能である。これによって、植物と人間活動との関係を明らかにしていくことが、深みのある食文化解明に役立つだろう。

引用・参考文献

第2章 藤原宮・京・飛鳥地域出土の植物種実

- SX7420 黒崎 直編 1992『藤原京跡の便所遺構—右京七条一坊西北坪—』奈文研
SE8431・SK8471 奈文研 1996『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 26』
SE275 奈文研 1995『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 25』
SD1901A 奈文研 2009『奈良文化財研究所紀要 2009』／奈文研 2012『奈良文化財研究所紀要 2012』
SX10820 奈文研 2012『奈良文化財研究所紀要 2013』
SE4080-4097 奈文研 2003『奈良文化財研究所紀要 2003』
SX4122 奈文研 2004『奈良文化財研究所紀要 2004』
SD4089-SD4090 奈文研 2003『奈良文化財研究所紀要 2003』／奈文研 2003『奈良文化財研究所紀要 2003』／奈文研 2004『奈良文化財研究所紀要 2004』／奈文研 2007『奈良文化財研究所紀要 2007』／奈文研 2008『奈良文化財研究所紀要 2008』
SD1347 奈文研 2003『奈良文化財研究所紀要 2003』／奈文研 2004『奈良文化財研究所紀要 2004』／奈文研 2007『奈良文化財研究所紀要 2007』／奈文研 2008『奈良文化財研究所紀要 2008』
SD4121 奈文研 2004『奈良文化財研究所紀要 2004』
SD4280 奈文研 2008『奈良文化財研究所紀要 2008』

第3章 平城宮・京出土の植物種実

- SX19196-SX19202 奈文研 2010『奈良文化財研究所紀要 2010』
SX19198 奈文研 2013『奈良文化財研究所紀要 2013』
SE9218 奈文研 1981『平城宮発掘調査報告XI』
SE17488・SE17505 奈文研 1997『奈良国立文化財研究所年報 1997-Ⅲ』
SE6166・SE7094 奈文研 1985『平城宮発掘調査報告VII』
SE16030 奈文研 1994『1993年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
SK219 奈文研 1962『平城宮発掘調査報告Ⅱ』
SK820-SK2102 奈文研 1976『平城宮発掘調査報告VII』
SK1623 奈文研 1978『平城宮発掘調査報告IX』
SX19198 奈文研 2011『奈良文化財研究所紀要 2011』
SB7802 奈文研 1981『平城宮発掘調査報告XI』
SB18500・SD3825 奈文研 2011『平城宮発掘調査報告 17』
SD3715・SD3765 奈文研 1981『平城宮発掘調査報告XI』
SD2700 奈文研 1983『昭和 57 年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』／奈文研 1987『昭和 61 年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
SD3410・SD17650 奈文研 1998『奈良国立文化財研究所年報 1998-Ⅲ』
SD5575・SD5505 奈文研 1981『平城宮発掘調査報告XI』
SD1900 奈文研 1978『平城宮発掘調査報告IX』
SD11600・SD16742 奈文研 1996『1995年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
189 次 SE40 奈文研 20003『平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告 旧石器時代編（法華寺南遺跡）』
SE4116-SE5205 奈文研 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』
SE6432-6657 奈文研 1997『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』
SE1305-1880 奈文研 1989『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』
SE950 奈文研 2007『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』
SE491 奈文研 1993『西隆寺発掘調査報告』
SK7699・SX7686 奈文研 2001『奈良国立文化財研究所年報 2000-Ⅲ』
SX6530・SK6577 奈文研 1997『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』
SD4750-SD5310 奈文研 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』

SD4951 『奈良国立文化財研究所年報 1998-Ⅲ』
SD17777・SD17779 『奈良国立文化財研究所年報 1998-Ⅲ』
SD7090・SD7100 『奈良国立文化財研究所年報 1998-Ⅲ』
SD5200・SD4361 奈文研 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』
SD650 奈文研 1976『平城宮発掘調査報告Ⅵ』
SD6400・6451 奈文研 1997『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』
SD1300 奈文研 1976『平城京左京八条三坊発掘調査概報 東市周辺東北地域の調査』／奈文研 1983『平城
京東堀河 左京九条三坊の発掘調査』
SD920 奈文研 1984『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』
SD1496 奈文研 1989『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』
SG1504・SD1525 奈文研 1976『平城京三条二坊六坪発掘調査概報』

その他の引用・参考文献

井上和人 2007『日本古代都城制の研究』 吉川弘文館
小澤 毅 1997『日本古代宮都構造の研究』 青木書店
芝康次郎・佐々木由香・バンダリ・スダルシャン・森勇一 2013「平城宮東方官衙地区 SX19198 の自然科学分
析―第 440 次」『奈良文化財研究所紀要 2013』、209-215 頁、奈良文化財研究所
神野 恵編 2014『香辛料利用からみた古代日本の食文化の生成に関する研究』平成 25 年度山崎香辛料財団研
究助成 成果報告書、奈良文化財研究所
関根真隆 1969『奈良朝食生活の研究』 吉川弘文館
関根真隆 2001「長屋王家木簡にみる物名について」『研究論集Ⅻ 長屋王家・二条大木簡を読む』、149-182 頁、
奈良国立文化財研究所
中村至大・井之口希秀・南谷忠志 2004『日本植物種子図鑑 改訂版』東北大学出版会
南木睦彦 1995「SD4750・5100・5300・5310 の大型植物遺体」『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報
告書―長屋王邸・藤原麻呂邸の調査―』、543-552 頁、奈良国立文化財研究所